芭蕉句選拾遺

全

中村俊定文庫
文庫 18
334

芭蕉句選拾遺

全

中村俊定文庫
文庫 18
334

芭蕉句選拾遺

序

詩は漢より起り和歌は
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

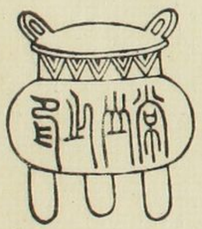
[illegible]まん家に芭蕉の翁
出て始て正風の眼を開き其[illegible]
哥の俤を打破て風雅を
[illegible]めて[illegible]と云場を説き古今
相応の風儀を表[illegible]を没後に
[illegible]六十余年都鄙一統二重を
業[illegible]の[illegible]後後

竜燈[illegible]て翁遷化五年の後
一世の句を集て浪の門人風国
沈私を選又魚遷の後元文戊午
武の蕉雨[illegible]濃[illegible]の拾補て
芭蕉句選を出版句数凡六百卅
余負[illegible]も稚所に残る
[illegible]卅[illegible]て伊州上野住

雀田何集相てまた拾ひて落の
書林寛治（當井筒屋庄兵衛）より校く寛治又是
に信厚く志を運ひて手こ彼
國くより求嵐古記を考探て記し
亦はるの作より一百九家句集抜粋
句選の両集より漏るものを以
古集より載る文章を附添して

七年の春こまた紙に板一枚
して句選拾遺と号し以風雅
の義雅の舟志を繼むるの礼を祖
堂像（故庄兵衛）性昔貞徳翁三ヶ月の
宴ら孔子ら蕉翁又は一毎月
試筆及選集の補輝を帝
せらるる先生ら今に至て二百余

年往古の貞操を失はして
一毫も産と成彼童婦の
三ッ指や駄々行は出る出るもの
酒こ性よ風雅の人に出て大
名望の家譜かんし千時
寶暦甲乙猛雪中手磬を
京の東洛より此序を託して許



そ孫と云麿寡陋の才を恥ず
古来年歯よりのるとそ高麿を
井筒の勉めに職を

老毫千梅

白義謹誌

此書を拵へ方々に一事八寸意
也等乃両立人序哥小番しを記れ
事経は爰小筆を執て自を方々孫
を玉恵経事は一を毎遠近の
序乃出 移は陸奥を経宮一姫八
白糸の自経を西を学く又四摩乃
迦邪文字を小枝葉の恵しを 拙
哥乃序乃を思をく之を太乃

編千載一金玉の詩句を作るの世にあるをもやすんじ西園の子を教ふるを以て一貫の文章を補ひ以ての[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]の文章八篇を[illegible]一大篇を弘めんとするものなり[illegible]

麦郷[illegible]寛治

[illegible]

[illegible]

中村俊定文庫

春之部

立春

庭訓往来注文庫の春
以て雪小こうを[illegible]乃松のきり
殺句あり[illegible]桃青宿の春
子の日[illegible]部人りん友[illegible]の邸
陶仲元人の書[illegible]

四立小寒
あとこ[illegible]梅さく餞所の垣根[illegible]
[illegible]

四令

巡賀六
一松[illegible]本ト編集
負三寅峯巳
夏[illegible]中
[illegible]角之如有
夏二

夏元
夏五辰 [illegible]
[illegible]

日常　山家ノ月　南地

南地ハ伊勢上野ノ人
元四此句卓袋ニテ
月待ノ時ノ　南地

手毬ニ赤き人形ぞ
春ぞ
桜咲くくるふ
先ちるや　宝竹ノ
布子
夏ぞ暑しもの花
ちるこしに　俳諧ハ人
てふ乃蝶の
畠ノ中や　あり
裏面や　蓮とのます　仲乃道
ちる雨や　蝉の　吹うる　川　柳

延六

貞元　荘子ノ画賛ノ

句集ニ
古木亭ニテ有
元三什句木白與行三部有
三月十日　蓼木白紙ニテ

元二

貞元

日

元四赤坂の庵ニテ
初ノ庵の時不住ニ寄日付

貞五　南地第四ノ月次初会

貞五辰　帆戸をやとりの句
此ほとりさにものもかをもみちき
はりとの句一枝ノ
右南和歌山庵ニテ

南地

元四年庵ノ人方ヨリ送ル一枝
木名の〳〵　菜一種乃〳〵れ
しをひろむるとつ人集ノ
の時ノ　ちるいみ
元七戌夫去庵ノ本庄旅舎ニ
金の時ノ　奇仙六句ニテ

こまちある百ヶ二葉乃茄子苗
藤ヶ　ちる　公魚を元八皆へ
袖をこまん　田螺の海苔漬をあ
山畑ヶ　笠ヶ　すへき枝の
初ちる　ちる　ちる八ちる日ある

旅立日

此ノ　ちを苔小袖ふつれの
似合　豆の粉めし　桜　柳
ちる　明ち　苔生よせん二株　柳
ちる　ちる　ちる　舟おを　柳原

元四年 丙子 大塩平八郎
お禁きくゝる一ヵ月

元三 南地

貞元

同

同三

万平別墅

とゝくや梅をこやせる花乃ちる

梅末亭ゆく 義堂住持ヲ勤ムトキ

土手ぶち松茸やこゝろ記 反古くず

世小ぢうるなるも 念仏や子刈

乾ゆるこゝ花ゝるや 雑炊さ酒

炊へハ餅して 冷ハ手そのちれ

入口ゆ柳手の行るゆ 壁ゆ古

すゝゝくこみ 焼家手 帰 葵

墅土乃家する 赤ものつきあゝれ

猪乃ゆ今年 青

初ゝ居ゝ家すゝ ふし出乃

根乃 紫草ゝくゝ ゝよ 俳田ゆ 柱く

種つゝ如 里 何と 麦のゝ

夏之部

あまのはのやまぶき 朝日かがやきぬ

手ぶりくく水源ながれしかなつまき

雨ぶりくかぶと事者記事苗代

赤ちゃくくも湖よりやまぶき夏ぶり初

瓜やめ生り新乃輝はれうへ

麦乃穂や涙よりめく時雨雀

小雪降至麦みく

うきぬ姫一十外の子と笑る人の果

土芽吹之種

貞四 俗五月

巡六

元四

日

日

日

日

日

日

日

元七中友市氏を訪

元七戌義田氏に

日年京初

大井川宿はずれ一夜の宿

[illegible]

[illegible]山義乃志ら中風乃筋

[illegible]を[illegible]ハ市意下[illegible]る立[illegible]月

[illegible]市[illegible]寂[illegible]し我[illegible]

碎[illegible]藤ん[illegible]子[illegible]る石の[illegible]

[illegible]月[illegible]蛙[illegible]癒[illegible]き[illegible]れ

世乃友や[illegible]の下[illegible]宿[illegible]上

駿河路や茶橋を[illegible]ひ

紫[illegible]し[illegible]周り中田うへ植

清[illegible]や宿下[illegible]こむ[illegible]まつだ

[illegible]士[illegible]れ[illegible]月冒

吉岡[illegible]

[illegible]

貞五

元二山岩氏[illegible]奇仙者

丘六

日

[illegible]

[illegible]や一夜ふれし[illegible]

尾州笠[illegible]

笠[illegible]や　窟を[illegible]す　月面

山の[illegible]　[illegible]

留[illegible]風中扇ふの[illegible]江戸みや[illegible]

百里[illegible]ハ雲井の下[illegible]

植[illegible]なぐよ[illegible]野乃[illegible]

佐[illegible]の中山[illegible]

今[illegible]笠乃下すみ

木啄の[illegible]住[illegible]

日

松舟ゆきて有

不ト亡世追悼

水むけてあくあひ事へ道の寺
松風の落葉を手向ぞ涼しき
納涼　東武より上りて人くよ若面を
東路に毛すね恥て庵すみ
西寺寄る置掛て知慧の土間かな
風清くる夫ら坊主ふくゆすず義
寺下ゑ胡紀志まふてや蛍の影
松島八好風拙者等の余とや
古今法人の風情この島より見ん

句給

六

与野をたゝらを是しく多くみを
めゝ志を松とを海のよ志三里計ゝく
を国くの島と奇也天高の秋を
野ゝ志なるゝくく松のくく松生
志ゝ里ゝるゝ法花や子いえん
のゝ松ゝ
志留くゝや多くふゝ紀く夏の海

貞二 梨堂雨持
號 山京雨持月

秋之部

初秋

秋来よりは耳もあらたまて枕に風
残ぬ夏は描も初へし今年の秋
水仙を奈物うさんを乃川
何さ毎の苔手時り蛍のとり
あはうかや是もまく家友京に
いとの蒸や月待里乃や寺畠
自まやし稽垂ひのを持京うう

元三

元六

延宝四辰 素堂氏ゟ此
僊して顔し江戸氏に
留らり

延宝六 安藤常春好仁
重を先とし政以去欲為
先とする有

元年不詳 宇治の中村といふ
所とある墓所のほとり
かれハともに有 吉蕉句集に
いせの中村といふ所にて得 有

元七戌 此句 蕉堂氏季挿子
年 深川ノ時 座半分子
伴うと云り 表六句有

貞元頃記

猫の子やはすりぬけて月を見る

京まちや菊に香のする豆腐くし

詠るや江戸にはまれな山の月

明月の出るや五十一箇條

木を伐て本口みるやけふの月

伊勢の国中村といふ所にて

秋かせや伊せの墓はら猶すこし

猪乃床にも入るやきりきりす

風いろやしとろに植し庭の秋

深川やはせをを富士に預け行

外稿芭蕉庵句有く

元四 堅田柳涯可休亭にて
宵中七勝のさりへや より

元七戌 竹地氏宅留守方に八月
十五夜会 三吟歌仙有

同年

はせを葉を柱にかけん庵の月

祖父と親その子の庭や柿みかん

里ふりて柿の木もたぬ家もなし

めにかゝるくもやしばしの渡り鳥

蝶鳥のしらぬ花あり秋の空

堅田禅瑞寺にて

朝茶のむ僧しつかなりきくの花

近江路を通りける時日枝山の許より

[illegible]

剃捨る身には[illegible]

杉舟吟

畫賛 元伊賀今湖東辻村
僧 冠上家珍

川のくやちの小降まぬ蕎麦の莖
渋柿や一口ちらす猫の涙
江鮭ひりもやすらん富士乃湖
芦ホ家事花野ホ咲る蕎の邨
茸狩やひふ紀ホ年夕時雨
ちりつ寄る栗ホ拾ふ小川哉

九月尽

秋の暮男ハ泣ぬものゝ哀ホ

甲州より田ノ山家ホ杉人ひりと今ホ赤ホ下谷
翁志祝ホ来ホ
行脚祇法より伊賀
ひて出ス

岩嶺を遠く吟蓮葉方丈ホ
仙杖我ホ寺杖あり寺地ホ
拔て舎ホ作ホ日存の為ホ
雲つと絵くうて忘ふ
皆表よりて美京千変ス
人も句と味ホ才士文人ホ
ちら画ホ筆拔て
若藤姑射杖山の神人ホ
詩と能ホ人や丈絵ホ
雲ホ霧杖暫可ホ

冬之部

六出花

雪をまりの上戸の部くいはるひこう雪
冬庭や庭をいく有る部しの此
きしくくまをはまれ書ふあく火桶弘

人のうく初雪りの毋

初しく久雪初の字を家可毋家

紅分うすくよ冬菊しく

つくる雪赤乃庭をいまある時ゐ毋

貞元

元二 経典を[illegible]相事
[illegible] 面白ノ句

[illegible]田桂[illegible]変利[illegible]
青[illegible]
[illegible]
貞四蜀主の[illegible]句
[illegible]
[illegible]句可

元二
月六 [illegible]

熟田[illegible]
此海小艸[illegible]を拾ん笠[illegible]
いつく時雨笠を[illegible]
[illegible]出[illegible]
人[illegible]
一[illegible]
一[illegible]
摘[illegible]
[illegible]
籠 [illegible]

[illegible]江千梅家珍画賛

貞二 仲画賛

菊 [illegible]
[illegible]
[illegible]
仙化の文[illegible]
袖乃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

元六百[illegible]
[illegible]句
[illegible]
[illegible]

紀の路

貞元年仲春そのすゑ

日ぬ

元三

次御灸はり無り

寄りよりの事〳〵とてのの事

雜之部

沒年詠 百年 記浮身宿

附錄

一杵折賀　七十紙

右 大津より笠岐不昔の人なりと文書宮清て井筒屋主伝

一僧專吟餞別詞　仝

右 湖東辻村富氏梅吳家伝

一六玉川紀　太素

一芭蕉翁遠波忌追善詞　文艸

一三〆奚の紀　路通

右 三油 井筒屋伝来の写跡也

一 菜合 序　　文彦

文彦生年失伝 宰相所持させつつ
書記自書 并為定卿伝

一 百韻之伴　　仝

八仙観百韻 文彦生年や

一 奉納歌仙　　麥林

麥林生歿 和歌麥林人丸持参之今
并為定之請り伝ふ

杵折賀

此杵乃折くゝ名付るゝものゝ上つゝ
下めゝゝゝ野面まい目出度紅枝
事祝寿の折ゝ好程に汝以つまり乃
山と事生出事何国に里の儀ゝ
隠の分ゝゝみ栄ゝや志りゝ長樹枝
多り今ゝ世入ゝ母ゝ美人所長枝
具ゝ名ゝ隠ゝ以へ里人中ゝゝの
ゝゝ言小者ゝ弱ゝ屋ゝゝ

公卿平宣子宣子住むへからす
唯世其中を横槌あり

此槌乃世をうし　と云

椿を
梅の木の

俗世吟餞句合

杖所平家鞋と云事く笠の内平
名と云ふ元祿六丙寅年生乃
種俗世嘉氏江の東深川の門扉
を一歩も出むと書く此
俗世小風情と好き事と隙て安
く平義り術の身と為ん
又伊勢路小諸世を求て
多の情平此を原よ此筆を

すべて紀伊の国の名所を始め多くの
野や伏屋小泊り人絵中結構さ
来たしし事葉の交を好まるる
今此別るのみてかなる岸崇
高く第紙山なる江戸や彼方
雲結角なる変化て結構の業
難さうし来ちまて始めの人
事経夫の好次首とめて
又とられ又此岸に七年立ん
以り事社を見ちぬ

雲結毛乃

墨江家や芝の里

六月十日作

田中山本くゝ山へ変のおほく生れ
ゝり中まつまるとおゝ祢と玉川も
むつまるこのまゝまゝ紀を本ゝく
ゝやゝを人のめく学く待れ公ゝ
きゝ西ゝりは生八人を訪平ゝり
めつゝりれ窗八人を待事ゝる
直しまく玉くゝ山へゝゝ中へ
ゝきみる丸ゝ学ゝゝゝ祢ふや

先井手の玉川も殊に山吹の咲みち
てくれる色蒸かもきも玉
置流ふ春の面まゐや
次ハ和歌花恒のさよ姫をまつひく
あ雪く所乃国乃国乃津の国近
峰多飛来る玉川と
三月むしし話女の手つりやさくと
詞常ちく如清くあく砂玉川と
堅路の玉川ハ春の雪し乱よやうり
ちきの絵ち流ちくいろ色話

くまうハたり
丈五乃川ち流流と見へ如しは風よ
くちの春ちの春ちく春玉川ちと
おハ玉ハ宮殿く墨ちく旅人のもやや
ヒすれく多也へ乱りとすく話面ち
よ以春ちく程しく春のくら話玉川や
ひくあちく盛ハ春ち云面しちのく
くいちく寺ちく春へ春物と流ち春
おもひちく侍ん

たゝしく比丘くをんめう
ゆゑ子は空らや海しゝて

六玉川畫の不二

清水や

嶺嵩旅人　去來畫

芭蕉翁遠波忌追悼詞

京人のゆくすゑおもふ秋ゆゑ
毛吉
行と毋似ゝ西ハ一を移ル東
て心ゝ人ゝ事ハ知ハゆく人を
桂陽
のゝめ
ハむふ心の
十よ
七年の

喫茶酒酣喫茶話

丘壑涼忌夏日長

遺

[illegible]と陸逸千[illegible]と伊林[illegible]
[illegible]ハ[illegible]後[illegible]
[illegible]生の[illegible]を[illegible]
[illegible]塚と津[illegible]物あ[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]を見る人立むひて彼隨[illegible]の
[illegible]伊[illegible]の上野
[illegible]原石[illegible]
[illegible]引[illegible]墓[illegible]の勅[illegible]
[illegible]みの国[illegible]川[illegible]水[illegible]

[illegible]む[illegible]正[illegible]
[illegible]ハ[illegible]苔む[illegible]塔面物静
[illegible]湖北平田の[illegible]
[illegible]形[illegible]
[illegible]遠[illegible]東[illegible]深川[illegible]
[illegible]塚[illegible]名[illegible]宗祇
[illegible]弘[illegible]畫[illegible]侍[illegible]雜[illegible]
[illegible]塚の[illegible]
[illegible]
[illegible]西国の[illegible]生[illegible]
[illegible]の長[illegible]筑前の[illegible]

袍田まもと称のく一面の石を立て香
花を営みをなりとて芭蕉を祭る
ありし身のほどをあはれに思ひやるに
定まる事は波濤より八古翁蕉翁の
乃ち思ひ出ぬ侍りし小今の塚乃
年くありて形見のしるしひかりなかり
更しと一しほの哀を催しぬるの
外も難波の人乃昔時の申し出てて本
かの縁まで此所を風雅の家なり
てすくし手一坏の土を集めて地下に

あはれ　清雲を称んとの峰をまくらに
ひろむ誅は古ちり道傳へり凡
雅にありけく是を今に此翁のこと
たゞひろく恐れへきしのおかきハ
来く飛も流れゆくの雲とまし
あはぬのなおし乃得と称せし
明川うしに　あまりて山風が
木葉を集めて香ふ乃かをさし
をかきは侍る

侍らんと奉り経らく恨乃

啓蒙こうを

粟津野信丈草ホ

三關之記

[illegible]

[illegible]

朝之の一番第一なる

皇仁天皇の御宇東平金山彦女

[illegible]

神分給ふ載る是今[illegible]の一番

屋[illegible]

[illegible]

のかゝせ給ふ山背河内の境菊
渕の夏ゝ大伴の金村むすめ
はるゝ時ゝ物部の目大連
お板を向と以人ゝ大味二上の禁中
石中に猪田表乃神垣あれハ以来
あゝちみのゝ山ふさゝや月と雲
桜ふ京ゝに唐土人の彫物書
をゝゝ湯ゝ以まゝあ千丈
屋根旗絣を立国と名あ
むゝ如あゝゝ中ゝ天ゝ

下の定ふ破裏を多ゝ矢はゝ
乃書多ゝ事度ゝ桜事
神龍を母の流ゝ猪ゝ府大宰府
を置東平王位と称し帥の実刃と
ゝる代ハゝゝ杉よふ法ゝ人東夫桜
美陸近江の蒲ゝ世いゝはゝ
皇子陸位を争ひ立ゝふ二月十
胄を殊ゝ舟を消とす家の世辞人
ふ紀を西き人もむき陸ゝゝ乃
せしゝゝ中ゝ能板の芝花の

生を向稲荷に新乃雨の日を事
無御おなし物うらとき〳〵事
心身縁乃表れ苦平喜さの人秋
雲を小船〳〵をおもふ事〳〵見
形手〳〵もいつれ恒武天皇国
譜りの法神義を母ゑまひ崩時乃
御うを松原れ譜よおさめ事る
由へ小柏原院と中奉る　神更
千れ来のさへをおゆめを始墓
功を高る事偏に関る原れ代る事と

桑を世界と稲と申されし我
場平〳〵事〳〵詩作を奇る事
あるる中小右記辻氏陸郎書辞
機注家仲恒丸と伝る空山乃俳
うつる事思おく詩を歌義の
たれ乃夏茶やはを事先ら
茅の詩〳〵ハ俳諧の句を
人の恵解と筆を記あひる仲れ
技まを打る母生てうゆを際
此詩之梅氏赤概るを事〳〵今

須の里よりとりあつめて第とかいた
次くかろう好うかく業を撥まる

永やむまじき生涯やうの武蔵のふり乃
名をとゝ叫すゝ[illegible]へよかしあ者

事侍四のとゝ　寺井春
忌部伊勢子

菊合序

東花坊

むかし晋の陶淵明の菊を愛
する人世まれなりしかとも東籬むなしく九
月十三夜南山をのぞむ雲よりも
なほ人ゝは花簾下のうゝ牡
丹を重しとし芍薬を第一とす紅
白乃美をいろ〳〵和漢の人情の差
違しさて我邦は万葉集より菊を
えらびはじめ哥へ詠ぜし歌辞

年梅を口ずさみて歌人
菓の千代をうたふ詩人花の色
年ゝを毛ふ春ゝ此の八野山
咲ゝ花のうまゝあるべき花の姿ゆゑ
春ゝ毛と長永の初ゝ毛東洛ゝこの毛を
もゝ此のゝ毛ひて玉籠金墻の高といひ
翠籠細編ゝ毛とかほふゝの傳ゝ牡
丹小ゝ毛ゝ毛ひ事一と勢乃栄枯とかへり
ゝ毛れハこゝゝ世間の事毛ゝ
此ゝ毛し一ゝ毛ゝ世間の此ゝ毛

角ゝへ第二ゝ乃重屋毛すとあり
ゝふ大ゝ毛ゝ紀ハ天ゝ及ひゝ菓子
しゝ事赤人よりゝさゝるものを
世ゝうし八初雪薄毛ゝ乃ゝ金績
銀績八ゝの雨毛ほめゝ小金めぬゝ
仙ゝ毛ゝん源氏の あゝ毛ゝ
ゝうゝ毛しゝ今ゝ地毛乃ゝの
ゝ長籠世ゝ此ゝ釜山海とゝ
金雪紙風の名ゝ雪ゝ毛ゝ
ちゝつゝ年八ゝゝし角ゝん籠の

とうさしのとなく中くあるなもく
ひとゝ如ゝ紀ハ毎ゝひとゝ御法おゐハ
変永の来ゝ毛ゝ小ゝ毛ゝ堂ゝ多ゝ軍
毛ゝ正法のもゝめゝ名ひとゝすへく藻
家の菊ハ譜ゝ毛ゝ名とゝ毛ゝ物
あゝまゝく那ん〻非ゝ中ゝ毛ゝ国ゝ
飛ゝ川ゝく京菊ひとゝ毛ゝく楢の家乃
秘ハゝ毛ゝとゝ尾張ゝ黄ゝ小ゝ毛ひとゝ
美濃ゝ白ハ紙あゝ海ゝく新ゝ紀
ほゝ如ハゝ名ゝかゝゝ毛ゝ

ひとゝ江大津ゝ月下門の名ゝ毛ゝ
毛ゝ宮治ゝ山里ゝく雑ハの者
ハ名ハ紙ゝく伊毛ゝ芯麻乃
世ハ中ゝ毛ゝ唐者ゝ毛ゝ変ゝ葉ゝ立
毛ゝしゝさゝく百菊乃ひとゝ毛ゝ
ハゝ東ハ紙ゝ毛ゝ管ゝ毛ゝ或毛
詩ゝ咲ゝ毛ゝ抱ゝく毛ゝ遠ゝ毛乃
きゝ毛ゝ物ゝ大小ゝ毛ゝ
ゝ毛ゝめゝ毛ゝ月計ゝ毛ゝ菊ゝ
津新ゝ芯ゝ芯の大ゝん毛ゝ

ちりまよふて益なひ〻ものゝ形をやうあるも
すへてハ花瓶乃かとうんするゆくて
乃苔の辻をたゝ〻ゑハ鞠と〻ひすると
ふたゝびうくちをゑよりれる者と遠
てまゝ〻手あてる物をゝ〻ゝをゑう
ハ此外乃名をゝ知も苔ハむゝ〻ゝ仕方
ゝ紅葉とゝをほひ羅待ゝまゝれ
ゑ今ゝゝ花氣の様子ふゝゝやゝ
朱家の物ゝ形ゝゝ心地ゝゝ
ゝゝはゝやゝ乃菊合ゝ歌代

左使乃花をゝゝゝ中も左平金
翅ゝゝゝゝ紫宝殿ゝ者
門ゝ〻ふ菓のゆゝ日ゝ先をゝ人ゝ
ゝゝ〻ゝ門の三ゝふゝゝ左右ハゝ
ゝゝの日ゝ重ゝ〻ふゝ或ゝ
門河菜ゝ安ゝ右ゝ左ゝ将の名をゝ人
ゝ右通ハ苔ゝ碎をゝめゝ三人
鑑大和笠ゝゝふゝハ地のゝゝ菊
をゝゝをハんゝ巻ゝ人羅後をゝ
ゝ安ゝゝゝ及ゝ変あんゝふゝ今

年の[illegible]ハ人乃考り多き
ひすまつりて菊[illegible]千代の為し
[illegible]を考[illegible]しり程

寿乃恩ワ[illegible]赤し

武人のうれ

右記をうつし立一集ワキ角[illegible]
[illegible]ひて小句の下[illegible]支考[illegible]

百韻細評

風乃[illegible]所[illegible]平細記寒き[illegible]
此句ハ冬枯乃心細く[illegible]
さ[illegible]字重[illegible]

○跡[illegible]有る霜小[illegible]多道
古七夜の暁[illegible]

芥乃者山[illegible]の[illegible]

此句八月三の月のくまなきを見て旅人の
哀を誘ふ為なり旅人のさまを案に
へ〜たるうゝ八人跡板橋杖哀くゝふ
とり詩人の旅を作さしむ〜

紅葉を見て花ゝ出し〜ふ

花も紅葉も句の出変あり〜爰ハ
吾変ゝ付て楽に〜へ〜杜の仮屋ハ
をかしくあるべし

心ゆきて人うらやましし秋の暮

心ゆきてとは楽きく

案山子

案山子を義も杖て弓杖

一向ゝ句の意也

[illegible]

[illegible]ひ[illegible]事も服る業り
[illegible]と句勢とゝ地弓と詠る八[illegible]
弓杖八月おとゝるさまや案山子と人ゝ
月おとしゝん意を句勢とすて〜

飛ハ羽を狙ひ籠遇る遠さよ

地籠と四つ四の籠さよと作る

日しまあり句作れやうあり

遠く乃立変の時千傳者一変

足袋紙もむつりられハ袁千お句の

袋を作らうといふも

色〻持も 漫 沼 ち ち い

袁ふハう巻と井て袁人〻ハ句と

伝ふ付をもおもふ 芸ふ日長を書

寸ふるも初て

表 俗も出まく表自然御筆ふ入

附変自他の差あり

袁居跨イて紙衣踏さを

附所力あり

産変〻指似しやくを蛙〻

[illegible]の人を祖父[illegible]人まや
[illegible]ん

[illegible]くをん[illegible]る者屋
[illegible]ハ[illegible]者やハ[illegible]
及[illegible]ハ

義[illegible]ハ[illegible]つ[illegible]ふ[illegible]夢散
[illegible]る[illegible]ハ[illegible]

[illegible]又[illegible]盤[illegible]来日
[illegible]ハ[illegible]物を[illegible]出入の人
[illegible]

暖簾[illegible]引[illegible]笑ハ[illegible]
此[illegible]ハ[illegible]出入の心ハ[illegible]
首[illegible]ハ全[illegible]

屁[illegible]仏坪[illegible]
仏坪の二字ハ句乃[illegible]

屁向ケさして能と云ハうつて面白ろ
き合ぬし

明六 手自と寫か鉦 日向
貴かつて目利よ屁ヶ見てハ
見未あし

明六 を河岸 夜へ 出変り
信心ありさし

鮎 釣り竿 近付て 竿を借
自他吟力あるへ

明六ハ 出て 見る 袖の 合羽
赤飯を焼ハ焼さふやお膳紙れハ

二
引いて 居る 足を 出店へ出し 入て
主人のさとひるく芋庭おらぬ垢を
素足へ 但しハ渡し 舟ともらん

女房参詣戸小袋く云張
お向ハ寺立ル
嘆ク戻ル 庫ノ附届事
女房の見と参ふ事庫ノ届ノ
ハ暇屋の呼と云ふし
茶をやめて云ふ事や 太の西
附心明ふ云

佛絵乃外平時明しく佛ル
剃ル仏絵のあれ
習へ毛乃ふく筆佛ル事書
おル事の出ルし
諸房と資中へ附ル旅大工
佛ヒ人のヒ云ふ云ふ病ル
変ルと書ス

鳥ゝ箸と（擬古を愛す）

板乃間を過る西日かな

俗一句殘る

指折ゝ生た取て投る秋

板の目を数へし昔ハ懐かしく

来ハ逢ぬ人をあつて逢ぬ

蟬雲ゝ世世を経て静かなり

此一句惜しい生き吟

掛ものゝ蝿ゝ追ふ手ハ入れ

雲水入れの俗語

節句おゝ甲冑を光らせ

掛乞ひの節句おゝハ俳句ゝ殊ゝ

此一句をつまゝ全句の月なり

○蘭の根ハ長く長く妻ハ枝ハ年
高野ハ長く作る枝ハ年ハ多
句の光ハ変ずるを不変也

二ウ
雪乃ハ降る事ハ象と思ひ
コクビ
山雪ハ三寸の乳母と云ふ
祖母ハ孫ハ作者を世人定て俳
人ハ古来ハ高句古

引手ハ取ると取くらべ

加ゝ様ハ俳句ハ句ハ用ル

屋根ハ茅ハ結ハ結ハ
俳心ハ時ハ合ハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

まぐく已を西鼻にうく弾う自

さうあまりてと系ぼた

[illegible]むかく[illegible]る板寺こ情をん

をこひてすり[illegible]おこ句の稚以ふ[illegible]ハ

[illegible]く大丈乃義を敬うり

四のをこひてすり[illegible]ふの

をかくをおと書たへ

葱持寺[illegible]理ふう出る

所一句のさ海ふくんま四ふのをこひ

大きの論ふ[illegible]きをうたをこひ[illegible]ハ武[illegible]

三

菓乃遠い悌ハ大りく敷きこ

四外の姿稚た

机冬結んくまく掃ぬあり

筆の用もおすハかりし

百石は内義長 今は薄（クスキ）の事

おなじき郡の内一向のさ法八幡宮

四郎左衛門尉の所領なりしを古き文書にあらん

河内の国 [illegible] 誠しの事

[illegible] 河内の所領なりしを古き文書にあらん

麦畑 [illegible] 石新屋 [illegible] 河内 [illegible]

南向なる故しく稲の麦を [illegible] 旅籠屋

若し号八幡宮よりとも [illegible]

稲 [illegible] 意乃さめて 粒 [illegible]

世にいう金雑寺しまたといつるの点

なし麦畑を石新子 [illegible] 粒き方の

越四郎 [illegible] 者へし

返 [illegible] 仏 [illegible] 水

此稲り金雑寺 [illegible] 安のとこひの云う

らぬ八点取の事あらん

[ハクジ]

求聞 拾うり八序裏小引うる
三句のうれむつり和ふこ仏学くとハ
赤少拾ろ移りし歌八引き清ちん

重打乃 打しくうる春ち歌
おく読へきや四一句少くし

露を 張くし 打る 茅 会
俳一句 ゆるる

上掛りめのとさ浮さ如取身
自他のさひちつ

嫁子乃 新屋へ 聟と 業田
附心ちうれし

外身 小里 重く 竹乃 蘆 定
猪手うう必百重くおう 況中
身の座ちと

趣ふかく重雪の新麿
竹の字をめやすあり

三ウ
二 格好酒を清き人屠る人
移り吟くしお歌の字たるし

一番 船の夜乃中小若く
しつり吟くし

世話を以ふ難分く優より已るる

先ハしつるあく忘ハ法ふ弓

両方 法土富 法ふ
お句の吟くハ巻十

構り序を屋を少きく又呵る
三句めやうはし

振り重つて半分乃兄
自他以ふ法

流伐とハ免を制感の摩利支天
性とう兵法とう云へ〳〵老婆の細工
移りあるなり

ふるゝ仙人く蕭国郎ゝ
古句の時平移ふ

重陽乃輪平猶と猶〳〵生ゝ
此夫ハ郎去るハ詩ゝ古句の移〳〵

乙甲好〳〵ゝ猶の移り事

大家乃平嶮を彼岸ゝ移る
此嶮ハ誤ゝ此ハ詩人ゝ古句の移り

家乃身目乃人への女子ゝ好〳〵来る
嶮の角方ゝ移〳〵

好来ゝ者ゝ移〳〵 家社会生
好事と云ゝ一句の秋作ゝ

等ぬハ達く事理屈や

さはく〳〵乃物好高美蓋至
たゝ光者むつ〳〵れ者生まつり
金ちし

きのふも通る畔塞く者
きのふ屋ゝく行き長ゝて
手ち夜明ゆゝし組しきのふハ屋兵
ゝ足とちゝめゝゝや

八講ハ蓋くも法良小重屋宵
此句市ゝんゝ者句明ちゝ者ハ球ち

蚊洗濯ハ足寄ふま者ゝ
此句ハ足ゝ切ゝ作ゝ四方を縛
盥ちゝハむち長ちんち明れぬくハ
お句ち四ち思し越而ゝ句作ゝち
此ちゝぬや

新伯母 姑平 兄弟 姑平 兄弟 多 出り

姑平 兄弟 みくしの字むつび

さ作者のこゝろ 踏出ぬ 理屈

あゝ いゝ

習 ゝ ゝ 多 負ぬ 商

法一句 付 自他の移り時 ゝ

国 者乃 當座 ゝ ゝ ぬ 新年

商の 附合 古 ゝ

新年 出 者乃 京物乃 徒

附 所 ゝ ゝ

蝶 掃 町 場 ゝ

手 出 ゝ

情乃 こゝ ゝ 祖父 ゝ

句 ゝ ゝ 移り ゝ

合掌

如佛者獨ハ此重ニ成ることを
相使の二字ヨリ考ヘ出る稱あんを

著語 法中皇土座ヨリ薄紙
法一句ハ成ることを

やうは法しるに伏龍の窮小絶果ヨリ
窮伏と是ハ成ることを伏窮と六字
到ニ伽羅の伏龍ヨリ窮ル

化さるれば佛ハ陸地ハ生
一句ハ成ることを

主待乃年ハ畠年ハ主ハ者
代ハ生と稱ることを

佛者遠ハ并ハ稻塚
ハ成ることを

殘
鬱鎖ハ謂と吟て刺ハ
四答附

七寸巻ハ右ニまゝ判ニ成ル

右ハ

世平生ニ[illegible]鏡ニ[illegible]

句の心ニ人あり武士の句

うつくしあり

五嘆

附合ハ古ハ[illegible]

句ハ三句のこゝろを

品定

[illegible]あしの浦ハ句平

[illegible]変あり

日向ハ目梅の[illegible]の梅

[illegible]の[illegible]あり[illegible]

[illegible]ハ嫌ふ人[illegible]

座て付へし

新酒ぬ味しも吟を高ハ季
おと岳平の古蒲なくもんきとや
此句も点の作あハゝも作るの眼
力見常なし

茶の肩 変毛 笈乃肩 体め
作りなくむつし味しハ世未と面
新しみ有らしき有し一句の働なし

野寺 痃も 文ふ 腹り

秀墨之十九点之内
下之
甚五
九九

十一庵

法師雅ハ孝く 作は雅ハ和らし
此題上平 勢古の落て 細評作行共ハ
能も殊し花を皆く判ホハ字れまし也

奉納歌仙　麦林下

八乙女を田ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]神楽
[illegible]て[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
酒屋[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
老[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
[illegible]合て[illegible]力[illegible]
ゑ[illegible]ゑ[illegible]仕[illegible]
くり[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]礼

徒らに鬱志を晴さんとて
海の方千里を望み
洛陽は二十三里を中に
美の子乃錦手牡丹を咲
誇やめて其の紅顔を誇り
大王を主すへる赤松乃家
奇や詩千うつる男山あり
琴手むしる妓王寺
咲を小名とゆふ所ゆ
手の拍ふるうひ物 脊

めー筆重もまく物を八ッ下り
日数八数千のひる荷 俵
門跡乃千本つまを抱む野
宮ゝを出る旅乃朝起
一叫面麦とり先へ蔚多り
茶は酒のきとりしく岡寺
眼鏡摩ものとり入へる目小麦さう
陸鏞岩ゆく うまと蔚く
宝皇ものまへ物ゆん
金ゝ志ゝ面 仙臺の 行道

笘あ手千石船の月いろ
鶏の俳諧 碧梧桐 立
智ウ年とのく新と節句ユスてやふ
俳ふ手の来て機を野広する
笠雲ふ幸所系生すめ合
法堂へちう記 町 静 ふ生
打打毛蓋木 花年 ふ海生
野ゥく つ ふる 薇乃 ふ集
享保十四年 蘭林 繍白

故郷にて新しき
もつて師匠へ一ふ陸ふる
う野也蕎ふ雨接に変ふ
川人生ふ明春
祝発の米子ふ
変化ふ秀吟紙憲は一
金ふ妙句ふ一ふ堂

句合友

正風の真味をしらんとおもはゞ
さて抄ハ此世に其風をしたひ
滅後に法義をあらそふものゝ
泪ながら句撰あまた積みの後
多くを袖に満て満しくして
武蔵野の山岸野草を遊去を
おもく飛雲流水の雅深く
流れを分けして業習して
おのつから向上にすゝみかへは

爰に寛政の頃一撰集に
まゐらせる句々を草紙にて
撰まんとせし雖然人もまた
川の奥ふかきものかはりぬる
火桃に満てし其後諸家を
経たる人撰集もまた然して
世の業のゝ雅をしめ楼の編
満ちとる世の大切何をまた
是に生の世に志せ當窓紙

芭蕉翁并門人
俳諧書林
京二条寺町
井筒屋庄兵衛

寶暦六丙子天春三月

葉陳
可風